

あわい(間)の街としての池袋、そして池袋モンパルナス

——社会心理学からの考察——

押見輝男

池袋モンパルナスはなぜ池袋という街で生まれたのか？ アトリエ村では、どのような人間関係がはぐくまれていたのか？ 「ま・あわい(間)」についての社会心理学の視点から池袋モンパルナスのこころを読み解き、池袋という土地の魅力に迫ります。

■はじめに

押見でございます。本日はたいへん貴重な機会をいただき、お集まりのみなさま、ならびに関係者のみなさまに心より御礼申し上げます。会場を見渡しますと、かつて私のゼミにいた学生ばかり来ていて、講演というより、教室で授業をしているような気分がいたします。このようにサクラが多いと、くだけた口調になるかもしれません。どうぞお許しください。

私は生後十か月の時にポリオを患い、高熱が下がったあとは両足に力が入らなくなって、這いずることしかできなくなりました。

就学年齢に達すると、母は一日も休まずに、私を小学校におぶつて行き、授業中は教室の後方に待機していました。遠足にも同じように行ってくれました。

母は立派でしたが、今思い返してみると、それ以上に立派だったのは当時の先生方だと思います。私の普通学級への入学を許可してくれた上、保護者が毎日教室にいる中で授業をしてくれました。このことのおごさを、私は最近身にしみて感じています。

ですが、世間はやはり母のほうに注目しますね。母のこうした行いが新聞の神奈川版に載り、それをお読みになった方が板橋にある「整肢療護園」という施設を紹介してくださいました。そこで、小学校三年生になる春、一九五三年（昭和二十八）、池袋駅の西口にあったバスターミナルからバスに乗って小茂根にある施設に行くために、母に背負われて池袋駅に降り立ったのです。今から六十三年前の話です。それが私と池袋の出会い、今日の話

のそもそもの始まりです。

おぼろげな記憶ですが、まだヤミ市（闇市）も残っており、当時の池袋駅の印象を一言でいうと「灰色のまち」です。私が「灰色」だと感じた一番大きな要因は、その日の天気が悪かったからだと思いますけれども（会場笑）。

病院生活は四年に及び、足にコルセットを装着し、両手で杖をつけなんとか自力で歩くことができるようになりました。入院中も、お正月と夏休みは実家に帰ることができましたが、帰省の時に病院から池袋西口に着いた際の池袋の印象はまったく記憶にありません。ですが、病院に戻るために池袋駅に着いた時の嫌な思いというのは、四年間ずっとありました。〈条件づけ〉により、池袋にはとても嫌な印象を持っていました。ただ、中学と高校は地元の学校に通いましたから、嫌いな池袋とは縁が切れて、〈条件づけ〉も〈消去〉され、中性的な存在になりました。

大学は、池袋にある立教大学に入学しました。どうしてまた遠い上に嫌な思いのある池袋にある立教大学を選んだのか。今でこそノンストップバスが当たり前になりつつありますが、当時のバスの乗口の高いステップが大の苦手で、あのステップを昇り降りするのならば乗りたくないというくらいバスが嫌でした。そこで、大学は、最寄りの駅から大学まで歩いて行けて、駅までは乗り換えがたやすく、心理学科があることが条件でした。その条件に合う唯一の大学が立教大学だったわけです。

大学時代を過ごした池袋での四年間は、子供時代の四年間とは対照的に、私の青春そのものです。池袋とはこんなに楽しいところだったのかと満喫していました。喫茶店、ジャズ喫茶、雀荘、芳林堂……。芳林堂がなくなつたと聞いて非常にショックでした。それから、百円で映画を観られた東武百貨店内の名画座には、授業を代返してもらって、よく通いました。

卒業後は立教大学の教員になり、総長も務めさせていただきました。総長を務めていた時、高野之夫区長とも親しくお話ができるようになったり、「新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」の立ち上げに関わつたりしまして、池袋の地元の方々との親交も深まりました。その後、二〇〇九年に立教大学を定年退職しましたので、今は外からの傍観者となっております。今日は、外側から観た池袋という街を、私の専門領域である社会心理学と関わらせながら話してみたいと思います。

社会心理学と一口に言ってもさまざまなものがあります。その中で私が学んできたのは、自分以外の人間——他者との付き合いと交流についての心理学です。つまり、対人関係や集団に関する事柄です。数ある社会心理学の中でも一番つまらないものですが、その特徴は、誰もが納得できるような客観的な事実に基づいて検証を試みる心理学であるということです。

その中で、私が長く取り組んできたテーマは、自分自身から一時離れてみて、自分を他者として客体的に眺める心理——専門

用語で「自己意識」、「自己客体視」、「自己フォーカス」です。こうした状態をどのように獲得するのか、この状態は人間関係にどんな影響を及ぼすのが研究によって明らかにされていますが、私は具体的に何が起きるのかという問題について研究していません。

この年齢になって、自分の学んできたことを振り返りますと、「自己客体視」だとか「自己フォーカス」という難しい用語を使わなくても、ようするに、自分自身に対して距離をとって眺める、つまり、「間」をとって自分のことを見て、考えることに過ぎないのだということに気づきました。いまは、社会心理学の領域だけでなく、広く「間」に関わる事柄に関して考えたり勉強したりしています。

そういうわけで、本日は「間」の観点から、池袋という街や池袋モンパルナスを考えてみたいと思います。

■社会心理学における「間」

社会心理学において、「間」というテーマが確立されているかという点、実はそうでもありません。いろいろなところに「間」に関する研究が散らばっておりますが、私の考えでは、以下の三つのタイプに分けられます。

①身体的「間」：パーソナル・スペース（個人空間）／立ち位

置のマナー

②心理的「間」：自己客体視（自分を見つめる自分）／脱中心化（付度・惻隱の情）

③時間的「間」：遠い先読み（his too shall pass）／漠とした先送り（some other time）

身体的な「間」とは、身体と身体の間物理的な距離のことです。典型的な研究例は、パーソナル・スペース（個人空間）についての研究です。人間は、他者が自分の身体の方に接近してくると不愉快な気持ちがして、距離をとろうとします。パーソナル・スペースとは、こうした現象から考え出された概念です。ですから、排他的経済水域みたいなものが、それぞれの人の身体のまわりにはあるということなんです。ただ、パーソナル・スペースは排他的経済水域とは異なり、相手に対する好意によって伸び縮みする風船のような空間です。パーソナル・スペースは、前方は広く、側面と背面は極めて狭いということが研究で明らかにされています。つまり、正面向士で向かい合って座る時はパーソナル・スペースを確保するため離れて座りますが、後ろや横に座られる時にはかなり接近してもそれほど不快でないということです。

このことから思いつくのは、「壁ドン」ですね（会場笑）。どうして正面からあれほど接近しているにも関わらず平手打ちを食らわないのか。パーソナル・スペースの特徴から考えることがで

きます。「壁ドン」をしても平手打ちを食わないのは、相手が好意を抱いていて、相手のパーソナル・スペースの前方が縮まっているということですから、相手が自分に好意を寄せていると見誤って「壁ドン」した場合、当然平手打ちを食らうわけです。

それから、立ち位置のマナー——つまり、相手と話す時にエチケットとして取るべき距離があります。「三尺下がって師の影を踏まず」は今ではもう完全な死語ですけれども、「恋人距離」、「社交的距離」、「演説距離」はまだ慣習として残っています。

身体的な「間」が物理的な距離であったのに対し、心の中の距離——心理的な「間」が二つ目のタイプです。この典型例が私の研究テーマである「自己フォーカス」、「自己客体視」です。自分に対して心理的な「間」をとって、自分自身を眺めたり考えたりすることです。

もうひとつ、他者に対して心理的な「間」を取る現象もあります。これは「脱中心化」と言います。たとえば、他人は自分と異なる存在で、自分とは異なる気持ちや考えを持っていることを理解し、精神的に距離を置いて他者との関係を眺めることです。この「脱中心化」ができる则相手の動機や気持ちを推し量ったり共感を持って接したりすること、つまり忖度したり惻隱の情を覺えたりすることができるようになります。

三つ目の時間的な「間」は、時間間隔やタイミングの善し悪しのことを言います。たとえば「間もなく」とか「間がもたない」

とか、「間の悪い時に来た」という言い方がありますね。これが時間的な「間」です。

今日の話の目玉として、みなさんに時間的な「間」の最新の研究例を二つ、ご紹介したいと思います。一つ目は、つらい思いや悲しい気持ちを体験している最中、体験している時点ではなくて遠い先の時点で、それがどうであるか考える——「先読み」すると、つらさや悲しみの強度が弱まる、という研究成果です。

アメリカの研究者は、これが英語の慣用句〈This too shall pass〉にあたる心理であると指摘しています。簡単な単語しか使われていないのですが、実際には訳すのが難しい。日本語の慣用表現でこれにあたるものを考えた結果、「諸行無常」、「万物流転」、「有為転変」が近いのではないかと思いました。ですが、この訳だと〈This too shall pass〉の前向きな感じが全く失われますね。現時点での私の中の適訳は「明けない夜はない」です。

もう一つは、欲望や衝動を直ちに実行、実現しようとするのではなくて、「いつか今度にしよう」と考えることでその欲望が弱まるという研究です。「いつか今度」は英語だと〈some other time〉です。よく考えてみると、これは私たちが常に体験していることです。何かを「欲しい」と感じた時、「いつか今度買おう」と考えて、「欲しい」という気持ちが薄らいだ経験は誰しもあると思います。ただ、「明日」とか「来週」とか、先送りにする「いつか」を特定してはいけません。研究によれば、「いつか」はあく

まで「いつか」という漠然とした未来でなくては効果がありませんので、ご注意ください。

■生活の知恵としての「間」[※]

私たちは常日頃、衝動や欲望に突き動かされたり、物事がうまくいかずに苛々したり、煩惱や悩みや心のジレンマを体験しています。そして、こうした苦しくて不快な状況を一刻も早く解消して楽になりたいと思うのが一般的な人情というものです。

こうした時に「間」をとって接したり考えたりしますと、どつちつかずの状態に耐えようとする意志が働いて、出来事や他者や自分自身に対して不即不離——つかず離れずの中立・中庸の姿勢がとれるようになります。このことの大切さと関連した格言「親しき仲に垣を結え」は、私の座右の銘です。この言葉は、家族や恋人、親友といった親しい間柄の関係において垣根を設ける、つまり心の距離を置いて接することが何よりも大切だという教訓です。

親密な関係にある他者に対して「間」を保って付き合うことの重要性を教えてください。ただ、この「垣」というのは、「生垣」のことで、至るところに隙間があって、相手の動静を把握することができる仕切りです。「分ける」あるいは「隔てる」と言っても、つかず離れずの距離を保ちなさいということを行っています。

なぜ親しい人に対して距離を保たなければいけないのか。それは、愛情や親しさが強まると、その気持ちに暴走しはじめるからです。強い愛情や親しみの感情に身を任せると、自分と相手は一心同体で、相手は自分のことをよくわかってくれていて、相手の考えや思いは自分と全く同じなのだと思ってしまう一方的に考えてしまいます。その誤解が諍いや、期待が裏切られたという怒り、攻撃的な言動、横柄で自己中心的なふるまいにつながります。こうしたトラブルは、親しい間柄においての方が起きやすいのです。ですから、「間」を保つことで自制心を働かせ、相手のことを思いやったり、冷静に状況を吟味したりできるようにしておかなければいけない。それがこのことわざの真意です。

大切なのは、何事も極端に走らない、そうなりそうになるのを自制することです。物事の両面に注意を払う姿勢を堅持していれば、物事の両面を熟慮した判断を下せるようになり、無理のない自然な解決が起きやすくなるはずです。

十九世紀ドイツの哲学者のショーペンハウアーの「ヤマアラシのジレンマ」という寓話は有名です。ヤマアラシとは、ウサギぐらいの大きさの哺乳動物で、胴体と尻尾に鋭い棘を持った動物です。ヤマアラシが寒さをしのぐうとお互いに寄り添うと、お互いの棘が身体に刺さる。けれども、身体を離すと寒さに耐えられない。それを繰り返すうちに棘が刺さらない距離で暖をとればいいのかというところに気付くという寓話です。ことわざだと、「待て

ば甘露の雨を得る」、「待てば海路の日和あり」が、これに近いでしょう。これらは「間」が持つ効果を、うまく表現した生活の知恵ではないでしょうか。

■「あわい（間）の関係」

今日のタイトルにも掲げている「あわい（間）」は、「間（あいだ）」という漢字を使います。この「間」という字を「あわい」とも読むことを知ったのは、上橋菜穂子さんの小説『狐笛のかなた』（新潮文庫、二〇〇六年）がきっかけでした。上橋さんは、香蘭女学校から立教大学に入り、立教大学史学科の大学院に進学され、文化人類学者としてアボリジニの研究者とられた方であると同時に、高名なファンタジー作家でもあります。

『狐笛のかなた』は、他者の心を感じ取る能力をもった孤独な少女と、この世と神の世界の「あわい（間）」に住み人間に化ける霊力を持った雄狐の、けなげな愛と冒険を描いた小説です。上橋さんは、この小説の中で「あわい（間）」を現世と異界との境界地帯と定義しています。人間というのは、一人ひとり独自の心世界を持つています。つまり、他者というのは異界の存在なわけですから、他者と交わるというのは「間（あわい）」で交わることです。このように、それぞれが自分の住む心の世界にとどまらずにそこから出ていき、それぞれの違いを受容して交わるこそが人間関係の本質だと思います。そうした考えからこの言葉

を大変重要に思っています。

「あわい（間）」という言葉に着目することになったもう一つのきっかけは、安田登さんの著作『あわいの力 「心の時代」の次を生きる』（ミシマ社、二〇一三年）です。安田さんは、能楽師のワキ方で、ボディワークの指導者です。ワキというのは、面を着ずに舞台上に登場して、状況説明、場面説明を行う、通常は僧侶とか旅人などの現実世界の人間なのですが、出会うシテというのは亡霊や妖怪、神といった異界の存在です。ワキは、シテの忘れたい思いを誘発し、引き出す媒介機能を果たしています。安田さんは、これを「あわいの力」と呼んでいます。また、人間の身体——「身」は、外の世界との「あわい」であり、身体こそ心を調整する媒介機能——「あわいの力」を持っているのだと思います。そうした考えがボディワークにつながるわけです。

私の考えでは「あわい（間）」とは、異質の者同士が出会い、対等に交流でき、お互いの自己実現を促しあう、境界があいまいな界限としての集団状況のことです。そこでは、二者択一的な判断は意味を持たず、異質の特性を持つ者同士が自由に交流し、お互いを許容、尊重し、お互いに高め合うような関係を築くことができます。別個の異質な存在であると認め合う者同士が、相手信頼し、真心を込めて付き合う。血のつながりで成立する集団とは異なり、信頼と真心という友情によって成立する関係を結ぶことがのできるのです。

社会心理学では、自分が所属する集団のことを「内集団」、所属しない集団のことを「外集団」と言います。「内集団」と「外集団」の関係で言うと、両集団の境界がそれぞれ曖昧で、出入りが自由で、内集団だけを良く評価する偏見——エスノセントリズムを持たず、ヘイトスピーチのような外集団差別を誘発しない集団関係が成立すると言えます。

私は、こうした人間関係や集団関係のことを「あわい（間）の関係」と呼びたいと思っています。「あわい（間）の関係」はお互いが「間」の思想を持つことで実現します。

■池袋モンパルナスの両極性

これより、日本の本題である池袋モンパルナスについての社会心理学からの考察に入ります。私は個人的な芸術的関心から、また特に好きな芸術家がいるから池袋モンパルナスに関心を持ったわけではありません。立教大学の総長を務めていた時、文部科学省はさかんに大学の地域貢献と地域連携を推奨していました。当時、私が問題視していたのは、立教大学の学生たちが私たちの学生時代とは違って、池袋の街で遊ばなくなってしまったことです。これでは大学生活の良さを享受できていないと思ったので、この状況を打破できるような地域連携や地域貢献の試みはできないものかと考えました。

そこで、高野区長らと話し合って、豊島区には美術館がありま

せんから、池袋の西口のいたるところに美術作品を展示して、まち全体を美術館にするという試みを企画しました。そうすれば、文化芸術振興だけでなく、学生も一般の人も池袋の街を出歩くようになるのではないかと考えたからです。それが、このたび関係者の皆様のご尽力により十一年目を迎えた「新池袋モンパルナス西口まちかど回遊美術館」のはじまりでした。

ただ、私たちの希望は、池袋モンパルナスを復活させることではありませんでした。池袋モンパルナスと呼ばれた芸術村や芸術家たちの、そこにあつた雰囲気や精神を受け継いで現代に活かしていきたいと考えたので、「新」をつけました。

池袋モンパルナスは、一九三〇年代から太平洋戦争の終戦にかけて、環状六号線・山手通りの西側、椎名町から要町一帯、今では暗渠となっている谷端川沿いにいくつもブロックで点在したアトリエ付きのアパート群のことです。そこには、地方から上京して住みついた若き芸術家たちが大勢いました。そうした若き芸術家たちや作品群のことを池袋モンパルナスと呼んでいます。

アトリエのほかには寝るスペースがたっただけのバラックの中で、売れる見込みもない作品を一心に制作して、多くの者は池袋西口の繁華街で安酒の力で憂さを晴らし、仲間同士の交友を深め合って暮らしていました。出身地も違えば経歴もさまざま、芸術上の主義主張、ジャンルもさまざま。つまり、美術上の特定の運動体というわけではありませんでした。

そこには、露光、小熊秀雄、寺田政明、麻生三郎、吉井忠、丸木俊、野見山晁治など、錚々たる芸術家や画家たちが屯しています。やがて彼らは徴兵され、池袋の街は戦火に焼かれ、戦後はバラバラに解体していききました。

私は、芸術的視点から作品について何か言うことはできません。ですが、社会心理学の視点からどのようなところに関心があるかと言いますと、池袋モンパルナスの若い芸術家たちがどんなことを考え、どんなふうにするまい、生活をしていったのか、どんな人間関係を築いていたのかということ。幸いなことに、それらは宇佐美承さんの『池袋モンパルナス』（集英社、一九九〇年）から読み解くことができます。宇佐美さんは、新聞記者を経てノンフィクション作家になられた方で、一九八五年（昭和六十）から五年かけてアトリエ村の生き証人にインタビューを行うなど、さまざまな資料収集の末、この本を完成させました。

アトリエ村は全部で五つのブロックがありましたが、宇佐美さんは、その住人たちの生活ぶりを「求道と放恣」と表現しています。「求道」とは、どんな逆境にあつても、たとえ売れる見込みがなくとも良い作品を生み出そうとする情熱を失わずに作品制作に打ち込んだ姿勢を言い表しています。「放恣」とは、生活者として奔放で退廃的であることです。つまり、いかげんでだらしがないということです。アトリエ村での生活ぶりとは、こうした対極的な要素で構成されていたということ。す。

野見山さんの回顧録を読むと、住人たちは自負と嫉妬の生々しいジレンマ、葛藤の中で作品制作に取り組んでいた様子がよくわかります。野見山さんは、池袋モンパルナスでの生活を「歯ぎしりのユートピア」と表現していますが、「歯ぎしり」と「ユートピア」というのは、普通は相いれない言葉です。「歯ぎしり」なんかしないで済む世界が「ユートピア」のはずです。この言葉は、アトリエ村の芸術家たちがプラスとマイナスの感情を同時に抱いて、その心の状態が持続する中で生きていたことを表しているのではないかと思います。

おそらく野見山さんは「ユートピア」という言葉の中には、お互いに助け合う、心を許した仲間たちの中で好きな芸術活動に打ち込むことができた生活に対するプラスの感情を込めていると思います。「歯ぎしり」には、世に認められる作品をつくりたいと思ってもなかなかつくれぬ、あるいは才能において敵わない仲間がいる、そうしたのがゆさや悔しさといったマイナスの気持ちが入められているのではないのでしょうか。

私が注目したのは、こうした両極的な感情に駆り立てられながらも、彼らが、自分のやりたい仕事に打ち込む生活を送ったところ。そうした生活を「歯ぎしりのユートピア」と表現された。そしてこれは、野見山さん個人の感想ではなく、池袋モンパルナス全体を特徴づける心理なのだと思うわけです。名声の獲得、貧乏からの脱出を望みながら、それが思うように満たされない現

実と夢あるいは願望のはざま——まさに「あわい(間)」の中で池袋モンパルナスの作家たちは精神生活を送っていたのです。

■アトリエ村における「あわい(間)の関係」、「間」の思想

自負と劣等感、卑下、嫉妬心の間——まさに心の中のゆらぎに身を任せたままそこで逃げずに屈折した心理のまま生き続け、ひたむきに創作活動に従事していた、それができたというところに、池袋モンパルナスの特徴があります。

心理学的に考えると、心のジレンマが発生すると、その不快な事態から逃げ出すために、心の中で対立が生じないように、合理化したり、逃げ出したりします。ですが、アトリエ村の住人たちはそうした行動をとらずに揺らぎ続ける心理を持続したままで耐えているのです。それがどうして実行できたかと言えば、やはり芸術家というのは現実の社会に対して「間」を取りやすい精神構造の持ち主であるということと、同じ心理を共有するあぶれ者同士の仲間集団——アトリエ村がシエルターになっていたからだろうと思います。池袋モンパルナスの芸術家の心理とは、私が考える「間」の思想の実践と成果そのものではありませんが、彼らの画業を発展、成長、完成させる上で、ここで紹介した心の揺らぎの持続と忍耐がプラスの影響を及ぼしていたことは間違いないと思います。

一般に集団というのは、家族や企業組織を考えていただくとわ

かりますが、権力構造や上下関係というものが生まれて、所属集団、内集団への忠誠と同一視が強く求められ、同時に他集団、外集団への蔑視と対立の姿勢は強化されやすくなります。ところがアトリエ村という集団は、生活面でも芸術上の主義主張の面でも同質化や均一化の圧力がまったく働いていません。学ぶ組織あるいは出身地や扱うジャンルごとに徒党を組むということもありません。村八分のような制裁も行われません。美術活動のグループ、会派を組みますが、その境界はきわめてルーズで、出入り自由です。

こうした特性を持つ集団を「ゆるい集団」と名付けたいと思います。「ゆるい集団」の出現は、個性を重視した友情を基盤とした連帯、それがアトリエ村であったからだと思います。我田引水で言えば、アトリエ村は、私の考える「あわい(間)の関係」のひとつの具体例です。「ゆるい集団」には、自分らしさを求め、その維持を助ける機能があります。アトリエ村が「ゆるい集団」であったからこそ、池袋モンパルナスの文化が花開き、成長したのだと思います。

池袋モンパルナスを社会心理学から考察する際のキーワードは時代背景としての戦争の影です。池袋モンパルナスの盛衰は昭和の十五年戦争と同時並行しています。このあたりの事情は、宇佐美さんの著書に詳しく書かれています。今年、春に再演された劇団銅鑼の「池袋モンパルナス」(小関直人作)でも中心に描

かれています。その公演を拝見して、池袋モンパルナスは過去の遺物ではなくて、現代を生きる私たちが危機に際してどうふるまうていくかを考える上で大変重要な判断材料であると再認識しました。

アトリエ村の住民の多くは、政治には無関心、あるいは関与に非積極的で、戦争協力の圧力に対しては、巧妙にやり過ごしていました。劇団銅鑼の「池袋モンパルナス」では、権力側の圧力が強くなると、鬚光や松本俊介たちのグループは、当時信奉していたシュール・レアリズムを表面的には放棄します。その他のアトリエ村の画家たちも軍隊機関への慰問などを行ったりしました。ただ、このように協力しながらも、彼らが国粋主義に傾倒することとは決してありませんでした。宇佐美さんによれば、池袋モンパルナスの住人は権力に対して表立って抵抗はしなくても、決して服従することはなかった——「まつろわぬ民」であったと述べています。それは、大正デモクラシーを体験し、個の意識を重視した世代だったからだと指摘しています。

私は、池袋モンパルナスの住人たちの戦争非協力の姿勢を「まつろわぬ民」というより、「声を上げぬ抵抗」と名付けたいと考えています。こうした姿勢は、事態に対して「間」^{*}の思想を持つて接することから生まれると思います。つまり事態や状況の両面を見て、それぞれに対する気持ちや考えを調整しようとして生まれる姿勢です。思想統制は許せないし、好きな絵を描きたい気持ち

ちもある一方で、官憲の目は怖いし戦争に負けて生活が崩壊するのは嫌だという気持ちを持っていた。こうしたさまざまな心の力を活かそうと思えば、抵抗の声は声高にはならないのではないのでしょうか。

もちろん「声を上げぬ抵抗」がどんな事態に対しても望ましい姿勢であると言いたいのではありません。それをいえば「間の思想」^{*}に対して「間」^{*}が取れていない証ですね。「声を上げぬ抵抗」がどんな時でも良いというわけではありませんが、池袋モンパルナスの場合には、それが己の信じる芸術活動に打ち込む、精進するということにつながり、池袋モンパルナスが開花するきっかけにもなったのではないかと思うのです。池袋モンパルナスは、現代を生きる私たちに、状況や事態の両義性や複雑さを直視し、受け入れ、自分の責任の下で個々の事態に対処していく必要性を教えてください。

■「あわい(間)」の社会的風土

ところで、池袋モンパルナスはどうして池袋という街に生まれたのでしょうか。みなさんの中には、池袋に対して「あまいな街」という印象を持っている方が少なくないでしょう。宇佐美承さんも『池袋モンパルナス』の中で、池袋という街の捉えにくさについて言及しています。銀座や新宿、渋谷は名前を聞いたけ

ということを行っています。

この印象は現在においても言えることらしく、朝日新聞の都内版で「池袋——城北の副都心の街」（井上恵一朗記者）という池袋の現在を伝える記事が連載されていました。全四回の連載で、テーマは次のようなものでした。

- ① 「サンシャイン前、乙女の聖地に」「オタク文化、東口全体に／ひしめくアニメ・マンガ関連ショップ」（二〇一五年十一月五日朝刊）
- ② 「西武百貨店 時代の一步先に」「セゾン解体：なお年7000万人の誘客」（同月十二日朝刊）
- ③ 「脱「エキブクロ」催しで集客」「東口はサンシャイン 西口一体で」（同月十九日朝刊）
- ④ 「池袋学」この街の個性に光」「立教大と芸劇、昨年度から開講」「進む「大変身」東西回遊デッキ／コスプレ客も便利に」（同月二十六日朝刊）

池袋の持つ多様で多面的で対極的な特徴を見事にあぶり出して見せた連載でした。私は、最終回でインタビューを受け、井上記者と話す機会があったのですが、その中で、池袋の街としてのコンセプトがなかなか掴めなかったとうかがいました。副都心だけれど、田舎感のあるイメージを「城北の副都心の街」というサ

ブタイトルに込めたとおっしゃっていました。「城北」には田舎っぽい響き、「副都心」には都会的な響きをそれぞれ感じます。たしかに、この二つは相容れない両極的な概念ですね。

私の池袋のイメージを一言でいえば、「怪人二十面相のような街」です。江戸川乱歩の『少年探偵 怪人二十面相』（ポプラ文庫、二〇〇八年）は、今読み返してもたいへんおもしろい作品です。この中で怪人二十面相がどのように紹介されているか、ご存じでしょうか。

怪人二十面相というのは変装の天才で、二十ほどの顔を持っているけれど、それが本当の顔なのか誰もわからない。当人さえもわからない。宝石とか美術品とか美しくて非常に高価なものを盗む盗賊ではあるけれど、その目的は私設美術館をつくらせて自分一人で楽しむことなのです。超オタクなんですよ（笑）。

また絶対に人を殺したり傷つけたりしないと心に誓っている。犯行日時も事前に予告して実行するのを楽しむ、通好みの都会人氣取りなのです。同時に、探偵・明智小五郎の単純な策略にいつも簡単に引っかかってドジってしまう、田舎っぽいところのある人物です。まさに私の池袋のイメージそのものの人物だと思いません。

何よりもおもしろいのは、明智小五郎と怪人二十面相の人間関係です。この二人はどちらが欠けても存在しえません。つまり、お互いの思いを引き出し、満たし合うワキとシテを交代して務め

る「あわい（間）」の力を發揮し合う関係なのです。だから、最近の作品では「怪人二十面相の正体は明智小五郎だった」とかいふ発想が出てくるわけです。

こうした地元意識が乏しい根無し草なところや、多面体で矛盾を孕んだ流動的などころが、池袋の特徴だと考えています。そうした特徴というのは、池袋が「あわい（間）」の街だからこそ發生するのだと思います。池袋は、田舎と都心、山の手と下町、ハイカルチャーのメッカとサブカルチャーのメッカのはざま、文字通りの意味での「あわい（間）」に位置する街です。

池袋は埼玉や奥多摩と隣接していますね。それから、青山や赤坂といった山の手にも、神田や下谷といった下町にも属さない中間地帯ですね。それに、ハイカルチャーのメッカである本郷、サブカルチャーのメッカである浅草の縁に位置している、まさに「あわい（間）」の場なのです。こうした「あわい（間）」の場では、さまざまな人やその思いが交錯し、固定した因習的な規範では処理できないような新しい流動的な関係が成立します。そうした「あわい（間）」の街が池袋なのです。

二〇一四年に、日本創成会議・人口減少問題検討分科会の推計で豊島区が東京二十三区の中で唯一「消滅可能性都市」に指定された時、どうして高野区長が「それこそ豊島区です」と言わなかったのか残念に思いました。それぞれが思いをもって集まってきた、思いを達成して帰っていく、そういうことが繰り返される街

こそが「あわい（間）」の街です。そうした点から見れば、ある意味、固定せずに変化を遂げるのは宿命であって、恐れるべきことではありません。高野区長はここにいらっしやいませぬので「消滅しても生き返るのが豊島区である」と声を大にして言いたいと思います（会場笑）。

立教大学が池袋に移転したのは一九一八年（大正七）です。立教大学はそもそも若者にキリスト教を伝えるために築地で作られた、異文化に属する学校です。今でこそ、そのあたりはカモフラージュされていますが、本来は強いミッションを持った、異文化に属する学校でした。移転が検討された当初、移転先の候補として挙がっていたのは、青梅街道、甲州街道、新宿でした。どうして池袋になったのかというと、地価が安かったからです。駅にも近かった。当時のトップがはつきりと語っていることには、一面が麦畑で、キリスト教教育に適していたということもありますが、私の推測では、資金不足もたしかにあったと思います。同時に、池袋という地が「あわい（間）」の地で、キリスト教という異文化を受け入れる土壌があると、大学のトップが見抜いたのだと思っています。また、アトリエ村をつくった人物は初見六蔵という熱心なカソリック信者です。池袋は文化の面でも「あわい（間）」の街でもあるわけです。

「あわい（間）」の街には、他者や異界との接触や交流を促進して、多様性や雑多性や両極性といった特徴を生み出す社会的風土

があります。池袋にもそうした風土、つまり「間」の思想を持つ人たちをひきつけやすい要素を持っていることになりました。「あわい(間)」の関係を育みやすいわけです。池袋が「あわい(間)」の街であったがために、当時はあぶれ者の職とみなされていた美術、芸術の面で大志を抱いた若者が地方から上京して集まり、互いに切磋琢磨して己を磨き、また散り散りに別れていきました。それが池袋モンパルナスでした。池袋モンパルナスとは、池袋という土地の社会風土の産物だったのです。

■池袋の展望——「あわい(間)」の街として

池袋という街が「あわい(間)」の特性を大事にし続けられれば、第二、第三の池袋モンパルナスの誕生につながると思います。私がいちいち描いている第二の池袋モンパルナスとは、国際学生村としてのグローバル・ビレッジである池袋です。

ご存知のように、近年において我が国の大学は競って国際化を推進しています。学生を海外に送り出すだけでなく、多くの外国人留学生を受け入れています。立教大学では、現在四百人足らずの外国人留学生を二〇二〇年までに二千人に増やす計画を立てています。立教大学だけでなく、都内の大学はこぞって同様の計画を立てて文部科学省から助成を受けています。

私は、日本に入ってくる外国人留学生が、大学が用意する寄宿舎に缶詰にされて過ごすのは、もったいないと思っています。池

袋の街で、日常生活を送ってほしいと思います。さまざまな大学に來ている外国人留学生たちが池袋に集い、お互いに切磋琢磨できるような交流の場ができれば、すばらしいのではないのでしょうか。

現在、首都圏の大学の在学生の出身地は、関東圏に著しく偏っています。そこで首都圏の大学は地方出身の学生を集めるために寄宿舎を用意したり、新たに奨学金を設けたり、入試改革をしたりしています。池袋モンパルナスのように、地方から若者が池袋に集まり住んで、さまざまな都内の大学に通って、池袋の中で交流を深めれば、街の活性化にもつながります。地方出身の学生が伝えてくれる、その土地の風土や実情というのは、外国人学生にとっても大事な日本の情報だと思つので、地方出身の学生が増えることで日本への留学もより魅力的なものとなるのではないのでしょうか。

地方出身の学生に池袋の街に馴染んでもらうために、全国各地のアンテナショップや郷土料理店を計画的に誘致する案を考えました。郷土料理が食べられる土地には、ちよつと足を運んでみようという気持ちになるのではないかと思つたからです。今池袋に中国人留学生が多いのは、やはりチャイナタウンがあるからです。ですから、ほかの国のアンテナショップや郷土料理店も増えれば我が国に入ってくる外国の国の範囲も広がっていきますね。

回遊美術館に関して言うと、池袋の街おこしということがメイ

ンでしたので、やはりその視点は「豊島区」ということに偏っている気がします。この地域の小中学生や高校生などを中心に考えがちです。そこから視野を広げて、特別企画などの形で全国各地の中高生の作品を募集して池袋に招いたりするのもよいと思います。

絵にかぎらず、小説でも論文でも、各地の中高生の作品を公募したり、こちらから声をかけて集めたりして展示することで池袋に来てもらう。やはり一度実際に足を運んでもらうということは重要です。あるいは、実際に足を運ばなくても、インターネット上で池袋に自分の作品が展示されていることを見るだけで親しみが湧きます。そうした試みで、池袋と全国各地の交流を促す企画を戦略的、継続的に進めることができるのではないのでしょうか。このような、夢と現実の「あわい(間)」の中で池袋への期待を述べて、本日の私の話は終わりです。ご清聴ありがとうございました。

(おしみ・てるお 立教大学名誉教授)